

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュタイナー教育思想の哲学的基盤(3) : フィヒテの自我論の受容と克服 <研究論文>
Author(s)	衛藤, 吉則
Citation	HABITUS , 19 : 35 - 49
Issue Date	2015-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/39030
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039030
Right	
Relation	



シュタイナー教育思想の哲学的基盤(3)

フィヒテの自我論の受容と克服

衛 藤 吉 則

(広島大学准教授)

はじめに

フィヒテは、シュタイナーが博士論文(*Die Grundfrage der Erkenntnistheorie mit besonderer Rücksicht auf Fichtes Wissenschaftslehre* 『認識論の根本問題－主にフィヒテの知識学を顧慮して』1891年)の主題とした哲学者である。かれは、フィヒテについて、カントの後継者たちのなかでも、「あらゆる学問の基礎は意識の理論のうちのみありうるということを最も生き生きと感じとった哲学者」¹⁾として高く評価している。

そのフィヒテは、「学一般の学(die Wissenschaft von einer Wissenschaft überhaupt)」としての哲学を基礎づけるべく、自我論を軸に「知識学」を構築しようとした人物として知られる。かれの自我論では、「絶対知(das absolute Wissen)」としての理性はカントのように二元的に分断されることなく、認識は自我の変容を通して一元的に高進可能なものと考えられた。シュタイナーは、こうしたフィヒテの自我論のうちに、これまでかれ自身が認識論研究の一環として取り組んできたゲーテやエドワルト・フォン・ハルトマンの理論的欠陥を克服する視点、つまり、〈内観的アプローチ〉や〈意識の可動性〉を解説する新たな視角を期待したのである(両者に対するシュタイナーの見解については『倫理学研究』第22号、2014年を参照されたい)。

では、自我論にもとづき知識の体系化をはかろうとしたフィヒテの観念論は、

認識の二元論を支持するカントの観念論といかにかかわり、懸案となっている「物自体」に依存する独断論をいかに克服していくのだろうか²⁾。

以下、まず、フィヒテの知識学における自我論の構造をシュタイナー論との関係をふまえ概括し、その後、フィヒテの自我論に対するシュタイナーの見解について説明を加えていきたい。

第一章 フィヒテの自我論

フィヒテによれば、哲学は「学一般の学」³⁾として、人間知の総体を可能なかぎり基礎づけることを課題とするものとされた。そして、この学一般を基礎づける学問こそ、フィヒテが「知識学」と名づけたものであった。

そして、かれが知識の根源に据えたものが「知の中の知(ein Wissen vom Wissen)」と称される理性としての「絶対知」であった。この「絶対知」としての「理性」は、カントのように二元的に分断されるものではなく、また内的意識である自覚(メタ認識)に結びつかない操作的な知的作用である「悟性」とも次元を異にするものとされた。フィヒテのいう「絶対知」は、意味や本質と一体であり、わたしたちの認識を根源で支え導くものと理解された。では、こうした「絶対知」は、いかなるプロセスを経て確実なものとして認識されていくと考えられたのであろうか。

フィヒテの場合、認識は自覚の程度、つまり自我意識の変容・高進の過程として描かれることになる。ここでは、自我は、知的直観としての自我(主客未分的自我)から、個的自我(主客分化的自我)を経て、理念としての自我(主客合一的自我)へと向かうものと考えられた。しかも、そうした方向性は、無前提な存在論の本質言明とは相容れず、連続的な自我の発展過程における目的因的な運動方向を支持するという認識論的立場にとどまる。つまり、そこでは、「理念としての自我(主客合一的自我)」は、あくまでも「理性の努力の最高目標」

として設定されているのであり、わたしたちは自我の純化を通してこの客観的理念にかぎりなく近づきうるという意味で支持されるのである。

以上の、フィヒテにおける自我の意識論的展開に、シュタイナーは、カント的認識論の克服を期待することになる。シュタイナーが注目する、フィヒテにおける「人間意識」の二つの探求方法とはつぎのようなものである。

ひとつは、経験的に確認されるものうち、〈根源的に意識から生じてくるもの以外を排除し自我の純粹概念を取り出す方法〉であり、いまひとつは、〈自己自身を観察することで自我の本性を見極めようとする方法〉である。シュタイナーは、そうした二つの方向において、いかに認識の根源原理が成立し得るのかについて検討していくことになる。

まず、フィヒテがとる前者の純粹概念を取り出す方法は、1794年の *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre als Handschrift für seine Zuhörer* (『全知識学の基礎—聴講者のための手稿』)でもっとも体系的に解説されていると、シュタイナーは語る。そこにおいてフィヒテは、意識を、何らかの経験的な能動性(Tätigkeit)をもつ作用と考え、根源的に意識から生じてくるものでないすべてのものを捨象することによって自我の純粹概念を取り出すことに努めていく。具体的には、そうした試みは、「自我をめぐる三つの原則命題」に帰結することになり、それらの命題分析を通して、カント的分断は総合的に架橋されていくとされる。

その三原則とは、「自我は根源的に端的におのれの存在を定立する(Das Ich setzt ursprünglich schlechthin sein eignes Sein)」⁴⁾という第一原則、さらに、「自我に対して、端的に非我が反定立する(so gewiss wird dem Ich schlechthin entgegengesetzt ein Nicht-Ich)」⁵⁾という第二原則、そして「自我は自我の内で、可分的自我に対して可分的非我を反定立する(Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen)」⁶⁾とする第三原則である。これらの命題を、フィ

ヒテは総合の学としての知識学の基礎命題としたのである。

つぎに、後者の自己観察(Selbstbeobachtung)的な方法は、フィヒテの1797年の著作*Ersten Einleitung in die Wissenschaftslehre* (『知識学への第一序論』)において提起されたという。そこにおいてフィヒテは、知識創出の根拠とされる根源的な自我意識の構造特徴を認識するための正しい方法として、かのアプローチを提唱することになる。すなわち、「あなた自身に注意を向けなさい。あなたの目を、あなたを取り囲むすべてのものから転じて、あなたの内部に向けなさい——これが哲学の初心者に対して哲学が最初に要求することである。問題となるのは、あなたの外部にあるものではなく、もっぱらあなた自身である」⁷⁾、というメタ認識的な自己内観的アプローチを推奨するのである。

では、以上みてきた意識の構造理解と自己内観によって、自我そのものは「絶対知」とかかわりいかなる変容をみせていくのだろうか。最後に、その内実を示してみたい。

フィヒテは、自我の根底に「絶対的自我(純粹自我)」を想定し、それを基底としつつ、「理論的自我」の状態を「実践的自我」の様態へと変容させねばならないと考えていた。では、まず、両自我の関係を説明するのに先立ち、かれの言う「絶対的自我」の性質を確認しておこう。

フィヒテによれば、「絶対的自我」とは、端的で無制約的な「存在(Sein)」であると同時に、行為的性質のもと統合な「定立(Setzen)」をもたらすものと考えられた。フィヒテ的認識論の主要概念である「自我の事行(Tathandlung: 根源的で純粹な能動性)」は、まさにこうした自我の存在の「事実(Tat)」と、自我による定立の「行為(Handlung)」の統合性ならびに即応性を表したものとイえる。そこでは、根源的な自我である絶対的自我が、行為的性質に基づき作用をもたらすものであると同時に、もたらされた産物を引き入れあらたな創造的実践作用を遂行する主体ともなる。そうした物の見方においては、思考する

ものとしての作用体と、思考されるものとしての実体性(基体)の分離は回避されることになる。

では、具体的に、この絶対的自我を基底とし、理論的自我はいかなる様態変容によって実践的自我と称されるものへと移行するのだろうか。

フィヒテは、この説明に際して「構想力(Einbildungskraft)」という概念をもちいている。かれによれば、「構想力」とは、「限定と非限定、有限と無限との中間を揺れ動く能力」とされる。これは、根源的な自我の能動性と、非我による限定の結果生じる反省的能動性との間を揺動しつつ、創造的に総合・産出する動きを促進する力とされる⁸⁾。しかも、この構想力によってもたらされた反立(Entgegensetzen)の様態は、感覚を通して「自己内発見(In sich findung)」として自覚される、という。ただし、理論的自我はこの事態が何であるのかは判断できない、とも語られる。したがって、フィヒテのいう理論的自我は、主体的な認識判断という認識行為に限定され、こうした感性的な直観の範囲までしか進むことができないことになる。

フィヒテの表現に従うならば、この理論的自我は意識の先鋭化の果てに、「己の能動性の対象の中で自己を見失う」ことになるという。これを超えて、さらなる〈総合の知〉を獲得するためには、わたしたちは、「受動として現れる能動性」の力を受け入れねばならない、とされる⁹⁾。ここで「受動」というのは、総合の知としての「知的直観」がわたしの外から働くことを意味する。しかも、この認識の「受動」様態において、なおも「能動性」が保持されるのは、そこにおいてさえつねに自我の能動性が働いているからだという。そして、まさにそうした〈総合の知〉こそが、カントの言う神的な「知的直観(Intellectuelle Anschauung)」(「意識されない瞑想的な沈思(Kontemplation)」)¹⁰⁾に当たるものとされたのである。構想力は再びこの神的な直観の力を得て、「自我は己のうちに定立するもの以外の何ものをも己に帰属させない」という自我の「統制原

理」¹¹⁾に基づきさらなる高みに止揚・限定され、表象のうちに総合されていく。これがかれのいう「実践的自我」といわれるものの働きであり、ここにおいて、定立と反立との総合が実現される。このような実践領域では、自我は基底において統制原理を保持するものの、そうした自我の統制は、カントの定言命法同様、非我を介さずに至上命令として自己に要請されていくこととなる。

こうした「理論的自我」から「実践的自我」への変転は、フィヒテの場合、わたしたちの個人性が消失し、理念としての自我である実践的自我が個人性を超えて機能しはじめることを意味する。しかも、そのような事態が可能となる根拠を、かれは、自我の事行機能と、自我の根底ではたらく「知的直観としての絶対的自我」の統制原理に置いたのである。

第二章 シュタイナーによる批判

1. 自我と思考の位置づけ

これまでみてきたように、フィヒテは、「学一般の学」としての哲学を基礎づけるものとして「知識学」を要求した。そして、その知識学の根幹をなす理論がかれの自我論となる。こうしたフィヒテの自我論に対して、シュタイナーは、ゲーテが進むことのできなかった内観的アプローチ(「汝自身を知れ」)を構造的に解明してくれるものと期待した。だが、その理論は「わたしたちを自我の根源的な能動性が開かれるところまで導いてくれた」¹²⁾、と一定の評価を下されるものの、無意識的に「存在するものとしての自我」の証明に終始したために、いかなる前提も置かない哲学的な根本学(philosophische Grundwissenschaft)としての真の認識論には至り得なかったと結論づけられることになる。

シュタイナーにとって「自我(Ich)」は「意識」の中心点とされ、自我がもつ「認識衝動」を起点に認識は働き始めると考えられた。つまり、「わたしを

含めた世界を知りたい」という認識衝動は、わたし自身の「意識」の中心である「自我」から発せられるというのである。そして、このことは同時に、「自我」は、〈認識衝動〉という形で認識に携わるにすぎないということを意味している。シュタイナーの場合、認識の根源的な作用は、衝動的な自我作用とは別の「思考(Denken)」のうちに見出されることになる。自我をみつめてそれにかかわる現象の変化をとらえることができるのも、思考の作用があるからだと考えている。それゆえ、シュタイナーにとって自我は、フィヒテがいうようにあらゆる〈存在・認識規定の前提〉とはなり得ないのである。こうした思考の優位性は、つぎのシュタイナーの言葉によって解説されていく。

「与えられた世界をたんに気づき知っていること(Kennen)とその世界の本質を認識すること(Erkennen)とは異なる。世界の本質は、それが世界内容と内的に結びつけられているにもかかわらず、所与と思考そのものによってわたしたちが構築しなければ自らに明らかになることはない」¹³⁾

つまり、フィヒテの自我論のように、現実性が自我のもとに歩み寄る最初の形態(Kennen)が、現実性の真なる形態なのではなく、むしろ自我を初発として「所与」と「思考」によって論理的に洞察される本質認識(Erkennen)こそが真なる現実的な形態なのだという。フィヒテによる抽象的な自我構造の記述は、客観世界にとっては意味を有し得ないと考えられたのである¹⁴⁾。しかし、それにもかかわらず、フィヒテは、自我のもとで探究することによって世界が紡ぎ出される(spinnen: 夢想する)という拡張的な考えをもち、世界像はかれにとってつねに自我が構成したものと解された¹⁵⁾。しかも、宇宙の構造をすべて自我から演繹しようとするフィヒテの理論は、シュタイナーによって、「物質が独立して存在することを否定し、それを精神の所産に過ぎない」とする経験内容のかけた「極端な唯心論」に陥る可能性がある指摘されることになる¹⁶⁾。

シュタイナーは、認識論の構築に際していかなる前提も置いてはならないと

強調する。かれの場合、〈論理学の無前提性〉を根拠として、根本学としての認識論における思考の優位性が解説されていく。すなわち、唯一、認識論構築の方法的前提となり得るものは、かれの場合、論理学のみであるとされる。なぜならば、説明の論理的構造が問われないような理論は、認識論としての妥当性をもちえないからである。そして、その論理構築に貢献していく主体的営みとして「思考」が最重要視されるのである。

2. 理論的自我と実践的自我の分断

フィヒテは、自我による無制約的な存在と定立行為との総合機能を、事行概念と、自我の根底ではたらく「絶対的自我」の統制原理とにみた。つまり、かれは、「絶対主観としての自我」を、存在と定立を兼ね備えた「無制約的な事行」として意識の根底に位置づけたのであった。しかも、「絶対的自我」は、限定と非限定との中間を揺動しつつ総合へと推進する「構想力」と神秘的な「知的直観」の働きを得て、理論的自我(能動性)から実践的自我(受動的能動性)への変移を果たすものと構想された。

しかし、シュタイナーによれば、こうした物の見方は、自我の「存在定立」のみが無制約的であり、自我から出発するところの他のすべてのものは制約される、という自我作用の分裂を意味するものと理解された。しかも、この自我は自己自身の存在以外のものに対する根源的定立の可能性を失うことになると批判される。

さらに、シュタイナーは、フィヒテの自我-事行理解に対し、〈認識する自我〉という立場に立つ場合、自我は、事行の状態として静止しているのではなく、事行を遂行し¹⁷⁾、絶対的な決意とかかわり、能動性を発揮すべきである¹⁸⁾、と主張する。そして、「即かつ対自的な能動性(Tätigkeit an und für sich)」¹⁹⁾を身につけることによって、自己についてと同時に、非我に関しても根源的定立が可能となると示唆するのである。

加えて、シュタイナーは、フィヒテがこうした考えに至ることができなかった理由についてつぎのように説明する。

フィヒテの自我論では、高次の主客合一的な認識は、無制約で〈能動的〉な存在定立にかかわる「絶対的自我」と、制約的で反省的な〈能動性〉に基づき反定立をなす「非我」とを、「構想力」が外から「知的直観」(受動として現れるが自我は能動性を保つ)の力を得て統合していくという図式でもって解説される。だが、この構造においては、自我の能動性が制約されるころの具体的な「もの」が考究できていない、とシュタイナーは語る。つまり、その「もの」こそが、かれのいう「思考」をさすのである。かれは、自我は無制約的な存在であるが、その自我を認識において制約し、非我との統合を一貫した主体の能動性のもとに成し遂げるものが「思考」のはたらきだというのである。フィヒテが言わんとした反省的な能動性や構想力、それに、根源的自我、非我そして知的直観において自我がもつ〈能動性〉は、シュタイナーに言わせれば、すべて自我の認識衝動を起点に活動を始める「思考」の機能と解されるのである。それゆえ、思考に浸された非我とは別に、知的直観という神的至上命令を通して自己に外から要請される知の体系は、カント同様、問題を認識とは別の領域に持ち込むことになったと批判されることになる。そして、フィヒテの自我が無制約と制約の両性質をもつことを鑑みて、シュタイナーは、いずれの方法をもってしても、無制約的なものから制約されたものへと至ることはできないと明言する²⁰⁾。

以上みてきたように、シュタイナーにとって、あらゆる学問の認識論的基礎を問題とする場合に重要なのは、フィヒテのように、自己定立を行う〈自由な自我〉の特徴を描き出すことではなく、むしろ〈認識する自我〉の特徴を明らかにすることであった²¹⁾。ただし、シュタイナーは、惹きつけられたフィヒテの認識論的立場について、最後につぎの言葉を付言している。

フィヒテがこうした帰結に至ったのは、ただかれが無意識的に「存在するもの」としての自我を証明しようとしたからにすぎず、もしフィヒテが認識の概念を展開していたとしたら、かれは認識論の真の出発点(自我は認識を定立するという出発点)に到達していたであろう、と²²⁾。

3. 自己認識の在り方

一方、シュタイナーは、フィヒテの自己認識の方法(「あなた自身に注意を向けなさい」)を、知識学へと導くための優れた方法であると評価する²³⁾。なぜならば、その方法は、特定の方向にではなく、あらゆる方面へと展開している自我の活動性を映し出し際限のない重層的な内省を可能とするからである。自己以外の認識において対象はわたしたちの外部にあり、明瞭で確実な概念へと収斂し記述されるが、自己認識(Selbsterkenntnis)においてわたしたちはまさに対象の中にあり、自己の内部で活動し、創造的に高次の概念を生み出しつづけることになるのである²⁴⁾。

しかし、そうした内観的方法は、フィヒテにおいて認識論的な展開をみることなく、知的直観と自我の協働による理念実践的世界像の「紡がれた物語(Spinnen)」という静止した形式的な見取り図が表現されるにとどまる。そこでの理念的な表象は、シュタイナーによれば外からの力によって「完成された世界像」とされ、そのようなものは認識の帰結にも前提にも置きようがないとされる²⁵⁾。したがって、ゲーテが進むことのできなかつた「汝自身を知れ」の内観的アプローチの構造をフィヒテの自己認識論に期待したシュタイナーであったが、この見方によってカントやゲーテが問題視した反省理論のアポリア(自己認識への懐疑；見る目は自らを見ることはできない)を克服することはできなかつた。

そして、シュタイナーは、フィヒテがこうした帰結に至った理由を、志向的な意識が現れる前提への洞察が、つまり、なぜそれが他のようではなくてま

さにそのように定立されているのかという根拠への洞察が欠けていたからであると。すなわち、自我が、思考の形式をもって所与に歩み寄る場合にのみ、現実的な内容に到達するというに理解が至らなかったためだと結論づけられるのである。

しかし、同時に、シュタイナーは、フィヒテの内に、自己観察を高次の認識へと展開しようとする兆しがあったことをも指摘している。それは、フィヒテが晩年(1813年秋)にベルリン大学でおこなった、内的な感覚の拡大問題に関する講義録 *Einleitungsvorlesungen in die Wissenschaftslehre : Vorlesungen im Herbst 1813 auf der Universität zu Berlin* (『知識学入門講義』)に見出されるという。

具体的には、シュタイナーは、フィヒテの、「この教説は全く新しい内的な感覚器官を前提する。これによって、普通の人間にとっては全然存在しない新しい世界が与えられるのである」²⁶⁾という言葉を取りあげ、かれの言う精神のための「新しい感覚の世界」が、自己認識を進めるなかで現れる重要な変化であることを認めている。シュタイナーは、自己認識を、「永遠で無限な本質へと至る道」ととらえており、正しい形での自己認識が「新たな感覚(neuer Sinn)」を生み出し、この感覚を通して、この感覚なくしては知られ得ない世界が開けるのだ、と語る²⁷⁾。

ここまでみてきたように、フィヒテは晩年に、「新しい感覚の世界」が新たな認識世界を開くことを予期したとされる。しかも、それは外から与えられた言葉を概念として受け入れる認識形態ではなく、事物からわたしたちに向かってくる言葉や現象の本質を、自己自身の内側からとらえる認識態度を意味するものであった。これは、外的な事物に対するわたしたちの知覚を閉じ、前提や偏見なく、自らが発するものだけに耳を傾け、そこに生じる変化を感じとる「気づき」の感覚ともいえる。そこで形成される内観的な判断は、その後の内外の

状況推移や外的感覚に依存した自己の判断と考量・比較され、さらなる純化(偏見のない内観)を経て上昇的なスパイラルの道を歩むのである。しかし、高次の感覚と認識の問題は、フィヒテにおいては、理論(現実)と実践(理念)の乖離を克服する理念として体系的に総合されることはなかった。シュタイナーはひきつづき、そうした現実と理念の総合を、内観的アプローチの先に自己意識を展開するヘーゲルの認識論にみていくことになる。ヘーゲルの場合、自己意識の極として設定される精神は、まさに思考の高次化の源泉となり、不完全な感覚や意志をも高進させていく原動力となる。しかも、そうした主客合一的な自我意識である「精神」は、個と普遍の弁証法的統一としてとらえられ、懸案であった反省理論のアポリアを克服するものとしても注目されるのであった²⁸⁾。

註

【凡例】

シュタイナーの著作からの引用は、シュタイナー全集単行版(Rudolf Steiner Gesamtausgabe)をGA、シュタイナー全集文庫版(Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk)をTbの略号で示し、そのあとに文献番号を用いて出典を示すこととする。

GA…Rudolf Steiner Gesamtausgabe,1956～. Rudolf Steiner Verlag, Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

Tb…Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk, 1961～. Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

その他の著作については、註において著者名、出版年(使用した版の年号)、引用頁を示す。出典の詳細は巻末の参考・引用文献に記す。

GA3(Tb628) : Wahrheit und Wissenschaft. Vorspiel einer “Philosophie der Freiheit”. Dornach 1989 [1892] . (『真実と科学』)

GA4(Tb727) : Die Philosophie der Freiheit. Grundzüge einer modernen Weltanschauung. Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode. Dornach 1987 [1894] . (高橋巖訳『自由の哲学』イザラ書房、1989年)

GA7(Tb623) : Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung, Dornach 1993 [1901] .

(『新たな時代の精神生活における黎明期の神秘主義と現代的世界観とその関係』)

- 1) Tb628, S.72f.
- 2) a.a.O., S.82
- 3) Fichte, J.G. *Über den Begriff der Wissenschaftslehre*. In: J.G.Fichte Gesamtausgabe, Werke Band 2, Hrsg. Reinhard Lauth/ Hans Jacob (Hrsg.), Friedlich Formmann Verlag, 1965, S.118. 隈元忠敬他訳『初期知識学』(フィヒテ全集・第4巻)哲書房、1997年、29頁。
- 4) Fichte, J.G. *Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre : als Handschrift für seine Zuhörer* Grundriss des Eigenthümlichen der der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen Leipzig : Bei Christian Ernst Gabler, 1794, S.98.
- 5) a.a.O. S.104
- 6) a.a.O. S.110
- 7) Tb628, S.79-80. Fichte, J.G. *Erste Einleitung in die Wissenschaftslehre*. Stuttgart 1797, S.186
- 8) Fichte, 1794, S331
- 9) a.a.O., S.349
- 10) Ebenda. ただし、フィヒテの場合、この事行を支える「知的直観」は主客が分化する以前の主客未分の前反省的意識であり、具体的な認識現実においては第一義的な意味を有さないものとされた。
- 11) Ebenda.
- 12) Tb628, S.78
- 13) a.a.O., S.85
- 14) Ebenda.
- 15) a.a.O., S.80
- 16) GA4, S.31f. 邦訳44-45頁。
- 17) Tb628, S.73
- 18) a.a.O., S.78
- 19) Ebenda.
- 20) a.a.O., S.79
- 21) a.a.O., S.75
- 22) a.a.O., S.79
- 23) a.a.O., S.79-80
- 24) Tb623, S.18 邦訳23頁。
- 25) Tb628, S.81
- 26) Ebenda. In: Fichte, J.G. *Einleitungsvorlesungen in die Wissenschaftslehre, die transcendente Logik und die Tatsachen des Bewußtseins*. Vorgetragen an der

シュタイナー教育思想の哲学的基盤(3)

Universität zu Berlin in den Jahren 1812 u. 13. Aus dem Nachlaß herausgegeben von Fichte, I.H. Bonn 1843, S 4

27) Tb623, S.17

28) ハーバーマスもまた、ヘーゲルが、カントの超越論的統覚としての自己意識を自らの理論の出発点としながらも、自己意識を自我の孤独な自己反省としてではなく、はじめから、特殊(個)と普遍との弁証法的な統一のプロセスのうちに理解していたことを指摘している。Jürgen Habermas, Arbeit und Interaktion. Bemerkungen zu Hegels Jenenser Philosophie des Geistes, in : Technik und Wissenschaft als Ideologie, Suhrkamp, 1969, S.14f.

The Philosophical Ground of Steiner's Educational Thought (3):

The Reception and Overcoming of Fichte's Theory of the "I"

Yoshinori ETO

The purpose of this paper is to clarify the philosophical ground of Rudolf Steiner's educational thought, focusing on his understanding of Fichte's theory of the "I." First, the construction of the theory of the "I" in Fichte's *Wissenschaftslehre* (*The Science of Knowledge*) is generalized on the basis of Steiner's interpretation. In Fichte's theory, it is thought that reason as "absolute knowledge" is not divided dualistically and that recognition is able to transform with the "I" monistically. In light of this, Steiner expects the possibility of an epistemology that involves the movability of consciousness. Steiner focuses on Fichte's two methods for finding the pure concept of the "I" and observing our own selves, discovering in them the significance of the "introspective approach." Next, Steiner's criticisms of the epistemological range and passivity of Fichte's theoretical "I" are described. Steiner criticizes Fichte's theory for its division between theoretical "I" and practical "I," and for the spring from unconstraint to constraint. Thus, Fichte's theory is rejected by Steiner on the basis that it requires us to accept a divine categorical imperative from outside, like Kant's. Steiner insists that such an intellectual intuition is not a part of any true epistemology.